



TAKE OFF press

TAKEO Future Frontier

【校是】 質実剛健 報恩感謝

佐賀県立武雄高等学校

校長通信 NO. 4 R5.05.15

文責 学校長 下村 昌弘

E-Mail shimomura-masahiro@education.saga.jp



学校 HP

作業ではなく思考を軸に –盲目的に正解を求めるのではなく試行錯誤を–

一学期の中間考査の週が始まった。チョット憂鬱な気分の人も多いかもしれないが、そもそも何のために勉強するのか原点に立ち返るいい機会だ。

「試験に合格してよい大学に入るために勉強するのだ」という手段の目的化に決して陥ってはいけない。本来学びは自由で楽しいものであるはずだ。(1年生には「勉」も「強」も辛いものという話をしたが、だからこそその先には心地よさがあることも想像してほしい。)

私たちは失敗したくなくて、急いで正解を求めてしまう。確かに入試でも定期考査でも正解することに点数をつけてそれが評価されるわけだからそう考えるのも無理はない。物事には正解があって、それに答えられれば優秀だと思い込んでいる。

しかし、この複雑な世界にこれだという正解はない。

だからと言って試験は無駄だといっているのではない。大事なことは、試験の勉強をするにあたって、「失敗」を避けるべきよくないものと考えたことをやめ、成功するためにとっても大切な学びのプロセスだととらえようということだ。

連休中の読書で面白いことを知った。禅の修行の話だ。

禅の修行は期間中に全員が失敗する仕組みになっているそうだ。例えばご飯を炊いたことがない人にいきなり「明日からご飯係になれ」と五升(8kg)もの米を薪で炊くことを命じる。やったことがないからはじめは誰でも失敗して叱られる。

要は、初めから正解を教えてもらったら、盲目的にそれしかやらなくなる。いわゆる思考停止の状態だ。本当に自分のものになるためには試行錯誤が必要だ。逆に言うとどれだけセンスのない人でも、失敗して試行錯誤したら成功できる。

全員失敗させて全員成功させる。だから禅は1000年続いているというのだ。

正解を急ぎすぎて、理屈も分からずにパターン練習で勉強しようとしているとしたら、それは大きな間違いだ。幸い、一学期の中間考査は範囲も狭い。これからの学びを作業ではなく思考に基づくものにできるよう、しっかり思考しながら試行錯誤して自分の将来を志向してほしい。

さて、ゴールデン・ウィークも明け、新型コロナの感染症法の位置づけが変わった。これを一つの節目として気持ち新たに勉強やスポーツ・芸術文化活動、外部機関と連携した探究活動に正面から取り組んでいこう。これからの学校生活ではいろんな不安もあるかもしれないが、不安は人間が安全に生きていくために必要な心の働きだ。不安を力に変えていく知恵と勇気が私たちには必要だ。

武高に学ぶ皆さんはそれができる人たちだ。たくさん挑戦し、たくさん試行錯誤し、たくさん失敗しよう。そしてそこから立ち直るタフさがまちがいなく君を強くする。

君は“タイゾー”を知っているか –映画『地雷を踏んだらサヨウナラ』に触れて–

今月上旬、2007年(平成19年)ミャンマーで反政府デモの取材中に治安部隊に銃撃されて死亡した映像ジャーナリスト長井健司氏の遺品のビデオカメラが16年ぶりに返還されたことが報じられた。ちょうど高校1年生が生まれた年だから知らない人も多いかもしれないが、内戦や紛争を報じる“戦場カメラマン”なる人の存在は聞いたことがあるだろう。

その“戦場カメラマン”の一人が本校の卒業生にいらっしゃる。一ノ瀬泰造。その人だ。



泰造氏は武雄高校在学時代、野球部に

公式HP: <https://web.archive.org/web/20000302192243/http://www.to-films.co.jp/index01.html>

所属し甲子園にも出場した。それはさておき、大学で写真を学び、フリーの戦争カメラマンとしてベトナム戦争やカンボジア内戦を取材。氏の撮影した作品はネットでも見ることができるが、戦争がもたらす過酷さはもちろんだが、戦時下に生きる市民のささやかな愛や兵士の苦悩を感じさせてくれてせつない。



泰造氏の生きざまは、2000年だったか、本校の芸術鑑賞会において映画『地雷を踏んだらサヨウナラ』が上映された時に初めて視聴した。在校生は神妙に見ていたのを記憶している。その映画をゴールデン・ウィーク中、改めて見返した。

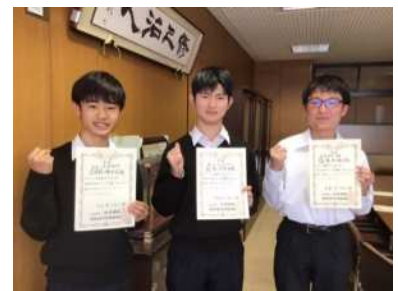
もちろんドキュメンタリーではなく、映画なので幾分の脚色はあるだろう。しかし、そこから伝わってきたものは、抑えきれないエネルギーであり、人と人との紐帯であり、夢であり憧れだった。

“タイゾー”はアンコールワットへの単身での一番乗りを目指していたが、1973年、26歳の若さで「うまく取れたら東京まで持って行きます。もしうまく地雷を踏んだら、サヨウナラ」とロバートキャパ（ハンガリー生。戦争報道写真家）の言葉をもじった手紙を残し、消息を絶った。

映画は武装組織に捉えられた“タイゾー”がアンコールワットに駆け出すシーンで終わっている。皆さんは“タイゾー”の後輩だ。いつかどこかで氏の足跡を感じて自分の生きる力にしてほしい。

“どこからでも打てる”無限の展開に魅力 一囲碁部 県大会優勝 全国へー

第47回全国高校囲碁選手権大会佐賀県大会において、小柳壮生さん（3年・写真中央）、神田陽向さん（2年・同左）、馬場雄大さん（1年・同右）が団体戦で優勝し、全国大会へコマを進めることになった。



3人は小学校の低学年の頃に囲碁に出会い、将棋やオセロと違ってどこからでも石を打てる、無限の展開がある碁の魅力に惹かれた。そして対局後には、対戦相手と試合展開について率直に感想を語り合う時がとても楽しいという。

全国大会は夏休みに開催。「まずは一次予選を突破したい」と謙虚に、しかし力強い眼差しで決意を語ってくれた。なお、個人戦でも小柳さんが優勝、神田さんは2位の結果を残している。

僕たちは大変な時代を生きてきた ー中高合同遠足で“ヤッホー”の雄たけびー

4月28日、絶好の晴天に恵まれ、コロナ禍でここ数年中止になっていた中高合同の遠足が満を持して実施された。



歌垣山への登山に先立ち、青陵中で生徒会の企画によるレクリエーションを実施。約1000人の大所帯を動かすのは大変だったようだが、生徒一人一人が的確に行動し、会を盛り上げてくれた。

歌垣山までは往復約15Km。決して楽な道のりではなかったかもしれないが、クラスや学年、先生との親睦を重ねながら、無事、歌垣公園へ。

閉会式では古賀孝太郎生徒会長が「僕らはコロナという厄介なもののおかげで大変な時代を生きてきた。そのコロナも終息が近づいてきている。今日はそのうっ憤を晴らしたい」と1000人の“ヤッホー”を先導した。

歌垣山は肥前風土記の時代から若い男女が歌を詠みあい、五穀豊穰と互いの友和を祈念した場所。

佐賀平野にこだまする“ヤッホー”の声に、自然の息吹を吸収した中高の若い生命力と紐帯を感じた。中高が一つになった瞬間だった。

【当面の主な予定（5月後半）】

15日（月）中間考査（17日まで）
17日（水）国スポ講演（1年）
18日（木）振替休日

19日（金）生徒総会
25日（木）高校総体壮行式
26日（金）高校総体（30日まで）
31日（水）全校集会